

特集1

〇〇産がブランドになる

「産地名」にこだわるものづくり

ブランド野菜やブランド肉など農業の分野では当たり前になった感のある地域ブランドだが、ものづくりの分野では地域や産地名を前面に出している企業はまだ多くない。そこで、地域に伝わる伝統技術や特産品を見直し、誇りを持って産地名で新たな地域振興や自社の業績を上げている企業の成功例をお届けしたい。

栃木県足利市は、かつて繊維産業の一大生産地としてその名を知られていた。今も600社近い関連メーカーが残るその地で繊維製品の製造・販売業を営むガチャマンラボは、産直アパレル事業を行うとともに、地域の伝統的な絹織物である「足利銘仙」を復活させ、新たな商品開発に挑んでいる。さらには足利銘仙を海外に服地として販売するなど、グローバルな展開も進めている。

高い技術を持つ繊維産業の 厳しい現状を改善したい

織機をガチャマンと動かせば、万のお金ももうかる。戦後間もない昭和25年ごろ、日本の繊維産業は朝鮮特需などによる「ガチャマン景気」に沸いていた。平成25年に設立されたガチャマンラボの会社名はそこから付けられたという。

「昔のようにガチャマンとやったら方がもうかるようになることを研究する」という意味で付けました。最初、銀行でその名前を呼ばれたときに「ちょっと恥ずかしかったですが」と、ガチャマンラボ社長の高橋仁里さんは笑う。「でも、今はもう地元でもガチャマンという言葉を知らない人が多いんです」

かつての足利は、繊維産業の一

特集1 〇〇産がブランドになる
「産地名」にこだわるものづくり

伝統的絹織物「足利銘仙」を復刻し 地元の繊維業者と市場を結び付ける

▼ガチャマンラボの高橋仁里社長。「足利に戻ってきたばかりのころは、いつかは東京に戻ろうと思っていましたが、繊維と関わるようになり、やっぱり自分はこのまの人間だったんだと思うようになりました」



社名 ガチャマンラボ株式会社
所在地 栃木県足利市山川町30-2
電話 0284-64-7676
HP gachamanlab.com
代表者 高橋仁里 代表取締役
従業員 3人

ガチャマンラボ

栃木県足利市

大生産地としてガチャマン景気の恩恵を受けていた。しかしその後、国外から安価な繊維が輸入されるようになり、国内の繊維産業が空洞化していくと、足利の繊維産業も衰退していった。

「私は以前、東京で会社勤めをし、株や為替の運用などをしていたのですが、リーマンショックを機に足利に戻ってきました。親戚が機屋（織物工場）をやっており、臨時的に営業としてパリやミラノの有名ブランドに半ば飛び込みで生地を売り込みに行ったら、うまく売ることができたんです」

誰もが知っているアパレルブランドに持ち込んだのは高品質で織るのが難しい麻の生地だった。日本では高くてなかなか売れない。商社をさまざまな無謀な営業だったけれど、生地表面の表情が独特で

面白いということで、その場で購入が決まった。

このことから足利の繊維産業がまだまだ高い技術力を持っていることが分かる。と同時に、地元の繊維工場を回っていくうちに、足利の繊維産業を取り巻く厳しい現実も見えてきた。

「繊維の会社は収益を上げづらい。販売先の品質要求が高いわりに価格が抑えられている。さらに、時には取引額以上の補償も求められたいりする。それでどこの会社も不良在庫を抱えることになり、構造的にもうからないようになっていくんです。その状況を改善していきたい」と思い、会社をつくり、解決方法を考えることにしました」

欧州の高級ブランド業界に 新たな商機を見出す

その一つが、各工場の在庫生地を活用した「産直アパレル事業」である。ほとんどが下請け工場であるため自分たちで販売するルートを持つておらず、せっかくの高級生地が倉庫で眠ったままになっていたのだ。「足利周辺地域だけで生地の在庫が50億円分はあるといわれている、それをどうにかしたい」と思いました。足利には繊維